

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：57103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02162

研究課題名(和文)16世紀来華イエズス会士による異文化対応の諸相 - 「利瑪竇的規矩」の内実と展開 -

研究課題名(英文)Some Aspects of the Cross-Cultural Responses by the Jesuits who came to China since the Sixteenth Century: The Reality and Development of the "Matteo Ricci-Rule"

研究代表者

安部 力 (ABE, Tsutomu)

北九州工業高等専門学校・生産デザイン工学科・教授

研究者番号：60435477

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本件は、16世紀末に東アジアに到来したカトリック・キリスト教の修道会であるイエズス会宣教師の中国における活動に焦点を当てている。彼らは「西洋文化」を「東アジア」にもたらし、またそれらを理解、浸透させるために様々な方策を講じた。その代表的な方針がマテオ・リッチ(利瑪竇)による「利瑪竇的規矩」と呼ばれる、「現地文化への適応」方針である。本件が扱うこの「利瑪竇的規矩」は、東洋と西洋の文化が本格的に「衝突・融合」した先駆的例として、これまでも様々に取り扱われてきたが、「異文化理解」のあり方と内実を歴史文献(特にリッチの書簡集)に即して明らかにする、という特徴と価値を有している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本件の学術的意義は、「異文化理解」を歴史的文脈の中で、歴史資料に即して明らかにする、という点にある。特に16世紀に東アジアに到来したキリスト教イエズス会士達は、「西洋文明・西洋的価値観」の体現者であった。中南米などでは「侵略的植民地化」と一体的に布教活動を行ったと見なされているが、東アジア地域では「現地文化の尊重」を主眼とし、更に「現地文化との適応方針」を布教方針としていた。これは最終的には8世紀中国においては、イエズス会士の国外追放とヨーロッパでのイエズス会の解散、という形に帰結するが、彼らが残した異文化との理解適応への努力は現代においてこそ歴史的価値を有するものである。

研究成果の概要(英文)：This matter consider about the Jesuits activity (Jesuit is Catholic Christian congregation), they arrived in East Asia at the end of the 16th century. Especially, the focus is on their missionary work in China. They brought "Western culture" to "East Asia" and their various measures to penetrate the understanding of western cultures. A typical policy is called the "Matteo-Ricci's discipline" by Matteo Ricci (Li-ma-tou), that is a policy of "adaptation to local culture. This policy is a pioneering example of the collision and fusion of Eastern and Western cultures. In the past, this policy has been dealt with in a variety of ways as a "cross-cultural understanding," but this consideration has the value of revealing about the ideal way and inner meanings of "cross-cultural understanding," through the analysis of the historical literature (especially in the collection of Ricci's letters).

研究分野：中国哲学

キーワード：キリスト教思想 イエズス会士 マテオ・リッチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本件に関連する、研究開始当初の研究状況とそれらの背景は以下の通りである。

従来、16世紀の東アジアへ到来したカトリック・キリスト教宣教師の活動に関しては、各地域各時代について、既に多くの研究成果が積み上げられており、本件に関連する研究状況は次のように大別できる。

(1) 中国に於けるイエズス会の活動については、マテオ・リッチをはじめとするイエズス会士が明朝末期に来華し、清朝中期に国外退去させられるまでが主に研究対象となっている。無論、清朝中期以後もキリスト教修道会(ドミニコ会、フランシスコ会)は活動を行っており、それはアヘン戦争を経て、現在まで繋がっている問題として考えることも出来る。ただし、本件ではそれらを網羅的には取り扱えないため、「現代的課題」を念頭に置きながらも、主として明末清初期に焦点を絞り、イエズス会士の活動や著訳書がどのような影響を与えたかを見ていくこととした。特に、中国で流布し、東アジア地域にも広範な影響を与えたとされる『天学初函』成立前後の史料を中心として取り扱った。この点については、既に佐伯好郎氏、矢沢利彦氏、後藤基巳氏、柴田篤氏、葛谷登氏、安大玉氏等によって研究がなされている。

また、近年の関連研究動向の特徴としてはイエズス会士の残した欧文文献による分析がある。例えば、岡美穂子氏はイエズス会士と商人との関わりを「南蛮貿易」を鍵語として分析され、大きな成果を提出されている。また新居洋子氏も欧文文献を駆使してイエズス会士の活動に新しい視点を提示されている。このほか、桐藤薫氏の研究も本件遂行に大いに示唆を与えてくれた。

(2) 日本に於ける活動については、所謂「キリシタン研究」として、フランシスコ・ザビエルが来日する前後の活動からキリシタン禁制に至る時期までを、また「カクレキリシタン」の信仰形態の変化等をも対象として、海老沢有道氏、片岡弥吉氏、清水紘一氏、五野井隆史氏、岸野久氏等をはじめとする多くの研究者が注目し明らかにしている。また、キリシタン禁制以後の江戸期に、中国を経由して日本に伝来した「西洋学術」については、大庭脩氏や松浦章氏によって考察されている。この他、幕末から明治にかけては「洋学」として扱われ、鮎沢信太郎氏や杉本つとむ氏等によって、主に「国史、日本思想史」分野の研究として積み上げられている。

以上が「文字資料」分野の研究動向であるが、これ以外に、本件で扱う「典札問題」の一テーマである、「凶像」に関する研究成果としては、まず若桑みどり氏の一連の研究があり、本件の「利瑪竇の規矩」の包含する内容に大きな示唆を得た。それは、内田慶市氏・柏木治氏による『東西文化の翻訳「聖像画」における中国同化のみちすじ』に示されるように、「凶像によるキリスト教文化の説明」には、どうしても「現地文化との適応(習合)」が見られるからである。その点について、若桑氏は「(世界各地に見られる普遍的な)大地母神信仰」を指摘されているが、その延長線上に、本件で調査対象とする台湾における「カトリック・キリスト教(天主教)」の実態があると考えており、それはすでにマテオ・リッチ(より正確に言えばアレッサンドロ・ヴァリニャーノ)が示した「現地適応主義」に胚胎していたと考えるのである。その一方で、この「適応主義」こそが18世紀に発生した「典札問題」の根本原因であることを桐藤氏は指摘されている。この指摘の再検討を「現代的展開」という視点から、本件では考察を進めることとした。

以上が、本件に係る従来の研究状況であるが、先行研究の主たる対象は、それぞれ(日本、中国など)における各地域個別的且つ時代限定的なイエズス会士の活動であり、イエズス会士が活動を行った、東アジア全体を見渡した上での研究は皆無である。本件担当者の大きな問題意識としては、「西洋的価値観」と「東洋的価値観」における共通性(共有・受容)と差異性(衝突・排除)などの「対応状況」にあるため、俯瞰的な視点を持つことが必要であると考えていた。

それは当時の東アジアにおいて、イエズス会士は巡察使であるヴァリニャー二等の指導の下に活動を行っており、それぞれの地域の実情に根ざした布教を試みていたことを考え合わせれば、俯瞰的視点と個別的視点、更には現代をも含む通時的な視点を意識した研究が要請されることも考えたからである。

16世紀当時の東アジアにおけるイエズス会士を取り巻く状況が以上の様であると考えた場合、従来の研究では、対象が個別的視点に限定されていた感否めない。また、欧文文献による研究には「俯瞰的視点」は見られるが、「漢籍資料」の分析においては、あまり進んでいないのが現状であった。このような状況を見据えた上で、本件では各地域相互の連関性を考慮に入れつつ、それぞれの地域における「反応」の特色、独自性を比較し、浮き彫りにすることを計画していた。その結果、「キリスト教思想」という異文化に対する反応の「差異点」と「共通点」が明らかになり、それがすなわち各地域の独自性と東アジアの共通性に繋がってくるのではないかと考えたからである。

本件担当者は、これまでも上述の観点(相互地域の俯瞰的比較という視点)から研究を行ってきており、主に「文化的差異」が引き起こす諸課題に焦点をあてて考察してきたが、本件申請にあたっては、このような課題を「利瑪竇の規矩」を鍵語として分析していくこととした。元々、「利瑪竇の規矩」とは康熙帝が1707年に発したとされる文書に出てくる言葉であるが(「康熙与羅馬使節關係文書第四」矢沢利彦『中国とキリスト教』136頁)、この言葉が示す内容は、イエズス会士の中国での布教活動の破綻を示すものであると同時に、現代的には宗教の「可塑性」(カトリック=マラプー『ヘーゲルの未来 可塑性・時間性・弁証法』183頁)を示すものとも考えられる、それは「宗教」というものの再検討、再価値付けを可能にするものなのではないか、との着想に到ったのである。

以上が、本件の研究開始当初の研究状況及び本件の課題設定を行った背景である。

2. 研究の目的

本件を遂行するための計画として、主に二つのテーマ（方法論）を中心とした。一つは「時間軸」として、マテオ・リッチが到来した当時の中国の思想的状況を把握するための作業と、リッチ自身の理解が示されている『天学初函』と関連する史料の読解、分析を通して得られる明末清初の思想界への対応実態を明らかにすることである。もう一つは「空間軸」として、現代の東アジア各地域におけるキリスト教の在り方（取り巻く状況）について、聞き取りを含む現地調査（特に台湾）を行いながら、キリスト教徒の意識やキリスト教を始めとする「西洋的価値観」がどのような影響を与えているのか等について明らかにすることである。そしてこれら二つの軸を照らし合わせながら、現代的課題への示唆を、歴史的事実に見出すことを最終的に達成すべき目的とした。

まず、本件では、『天学初函』を始めとする明末清初の中国で出版された漢訳西学書を主に文献資料として扱ったが、それはイエズス会士の中国観がそこに如実に示されているからである。そこに示された中国観、そして方針として（細大はありながらも）共有されていた「利瑪竇的規矩」の内実を明らかにし、当時の実情を浮かび上げさせ、最終的に典礼問題が発生し、イエズス会士が国外追放となる原因がどこに胚胎していたのかについて明示できれば、と考えた。

また、本件の問題意識は上述のように「西洋的価値（概念）」と「東洋的価値」という括りにもあり、それは現代までをも射程に入れている。つまり現代東アジア地域におけるキリスト教の状況を考える際に、典礼問題が招いた結果は、今後の東アジアを考える視点としても有効だと考えたのである。

特に、現在の台湾で見られる「現地文化との適応（習合）」は「利瑪竇的規矩」の特徴的表れ、ととらえられれば、歴史上の「典礼問題」に対して「現代」からの解決策を示すことが出来るのではないだろうか。

上述の様に、従来の主たる研究対象は、イエズス会が到来した明朝末期から清朝中期であるが、本件では現代的課題も研究の視野に入れて調査分析と考察を進めた。また、東アジア地域全体を俯瞰しながら、各地域相互の比較を、異文化への対応という基準により考察することで、従来の手法では見えにくかった東アジア地域の共通性と差異性を明らかにできる、という特長を優位していると考えている。

このようなとらえ方を可能にするためには、より大きな見通しにたった歴史研究が必要であり、結果として従来無かった、史料文献上の課題とその分析・解決のために「（文化人類学的）現地調査」という手法を取り入れた、東アジア地域の共通性と差異性を探る好個の事例となったはずである。このような特色を持つことから、東アジア地域が共有できるものの発見や「宗教」そのものへの態度、そして「歴史」というものの「現代的性」について、より「生きた例」として、示唆や視角の提示ができることも目的の一つとした。

3. 研究の方法

本件の研究遂行においては、上述の「二つのテーマ」を念頭に置いた分析を実施するため、まず史料（文献）収集及び確実な理解、分析が要請される。その場合、独断や誤解に陥ることを防ぐため、また本件に関するアドバイスを適宜得られるよう、様々な研究会に参加した（毎月、九州大学において開催されている宋明思想検討会『羅近溪文集』輪読会及び『明儒学案』研究会など）。このような場を通して、同研究会メンバーである儒教思想や仏教思想などの各専門分野の研究者から本件に関する助言を仰ぐことにした。

また、これら研究会（九州大学）での文献（黄宗義『明儒学案』、羅近溪『盱壇直詮』）講読や訳注作業に参加することによって、天主教が中国に伝来した当時（明朝末期から清朝初期にかけて）の儒教士大夫や仏教に傾倒していた知識人の「宗教に対する意識」や当時のイエズス会士（及び天主教）に対する意識（受け取り方・理解）やそれらに見られる「誤解や齟齬」をも同時に精査し、本件にフィードバックできたと考えている。

本件課題推進にあたっては、これまでに行ってきた『天学初函』の分析を継続するとともに、マテオ・リッチが中国到達前からヨーロッパ宛てに書き送っていた「書簡集」である『利瑪竇書信集』の日本語訳作業を開始した。それは、マテオ・リッチが当時の中国をどのようにとらえ、何を考えていたのかを精確に把握する最も確実な方法だと考えるからである。更に、そこに収載されている資料には、マテオ・リッチの「中国観」とその背景（基底）に流れている「価値体系（宇宙観等）」をも見通すことが出来た。それによって、研究全体の見通しや問題意識を明確にすることができたと考えている。

また、継続的に行ってきた台湾における現地調査では、台北市及び近郊（新北市）における天主教教会については、網羅的な調査を完了できた（約150か所）。これら以外にも、嘉義地区や台南・高雄地区の代表的な教会に赴き（約40か所）、現地での調査を実施することができた。これらは改めて取りまとめの上、研究成果として発表する予定である。

4. 研究成果

（1）上記「書簡集」の訳出作業において、マテオ・リッチが見た率直な驚きや感慨が把握でき、またそれらを随時、ヨーロッパに送ることで、ヨーロッパのキリスト教世界にも、中国の情報を

もたらしていたことで、ヨーロッパにおける「中国観」を構築する重要な資料となっていたことも確認できた。訳出作業は以下の諸論考において発表している。

(2) 台湾における現地調査において、現代台湾における「キリスト教信者」がどのような「宗教観」を持っているのかをも把握、分析することができた。とりまとめ作業は進行中であるが、前述のように、「キリスト教の現地適応方針」を取っていたイエズス会の、「現代的表れ」として台湾をとらえることは、「宗教そのものの在り方」「東西価値観の融合」などの視点に於いて、16世紀中国におけるマテオ・リッチらイエズス会士の活動を反照的に評価できる根拠にもなると考えている。道教や仏教文化が濃密な現代台湾において、「宗教共存」がどのような条件に於いて成立しているのか、そのような状況を現代台湾の人々がどのようにとらえているのかについて、現地調査において、如実に把握することができた。その「共存性」は現代中国における「在り方」とは「価値体系」も含めて、非常に対照的である。

(3) 発表済みの研究成果としては以下の通りである。

安部力「マテオ・リッチ書簡集(『利瑪竇書信集』)訳注稿(一)」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第50号、143~152頁、平成29年1月31日、単著)

安部力「マテオ・リッチ書簡集(『利瑪竇書信集』)訳注稿(二)」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第51号、105~114頁、平成30年1月31日、単著)

安部力「マテオ・リッチ書簡集(『利瑪竇書信集』)訳注稿(三)」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第52号、71~80頁、平成31年1月31日、単著)

宋明思想研究会「羅近溪『盱壇直詮』訳注(二)」(『活水日文』第58号、63~82頁、2017年2月、共著)。

・上記以外に成果ではないが、2019年7月に、台湾中央研究院にて開催された「さざなみ：西洋学術と中国思想範囲における重層構造について 1600-1800」組織主催の「西洋学術と明清の際の文化変遷に関する国際学術ワークショップ(一)」に参加し、当該分野の世界的権威であるベルギー(ルーヴァン大学)のニコラス・スタンダー教授の招待により、当該分野の研究者による世界的組織である「EU CHINA」に加入することができ、現在、研究動向などについて世界中の研究者との交流が可能となっている。

また、本件課題が開始された平成28年度に、心臓病を発症し体調不良に陥ったため、その後も手術と入退院を繰り返すことになり、十分な研究活動を行うことができなかった。また、平成30年度からは本務校の業務が重大となり(副校長に就任)、調査結果の取りまとめに時間がかかってしまっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安部力	4. 巻 52
2. 論文標題 「マテオ・リッチ書簡集（『利瑪竇書信集』）訳注稿（三）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『北九州工業高等専門学校研究報告』	6. 最初と最後の頁 71-80頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安部力	4. 巻 第51号
2. 論文標題 「マテオ・リッチ書簡集（『利瑪竇書信集』）訳注稿（二）」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『北九州工業高等専門学校研究報告』	6. 最初と最後の頁 105,114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安部力	4. 巻 50
2. 論文標題 マテオ・リッチ書簡集（『利瑪竇書信集』）訳注稿（一）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北九州工業高等専門学校研究報告	6. 最初と最後の頁 143,152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宋明思想研究会	4. 巻 58
2. 論文標題 羅近溪『目于壇直詮』訳注（二）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 活水日文	6. 最初と最後の頁 63,82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----